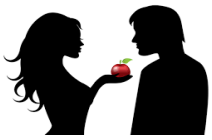

ブロス **健康情報** 第1号

薬の効果と“性差”について

「薬」は、効き方・特徴も様々

現在一般に使用されている「薬」は、開発段階から様々な試験を経て、広く一般的に体に優しく、害が出ないように設計されています。しかし皆さんの体がそれぞれ異なるように、薬の“効き方”にも差があり、ごくまれに、合う合わないといった事例が報告されています。先日放送された、NHK の番組**「性差医療の最前線～同じ病でも男女に違い！？～」**で、興味深い内容があったので、今回はその差異に関するお話をお伝えしたいと思います。

●「薬」に“性差”はあるのか？

今まで私自身も仕事をしながら、その薬の効果については、“年齢差” 例えばお子様で、臓器・器官が未発達だったり、高齢で体内での代謝・排泄の能力が落ちてきているなどの関係については注意していますが、同世代での比較において“性差”は無く同じであるとされてきました。しかし、昨今では海外でも“性差”について警鐘を鳴らす医師も多く存在しており、実際にその内容も報告されています。

●何故“性差”が論じられないのか

「薬」が一般に販売されるまでには様々な試験があり、理論上安全とされたものは動物実験を行い、その上で安全とされたものが、臨床試験を経て認可がおります。しかし、以前の「サリドマイド薬害事件」等が発生してしまった時代から、臨床試験には「女性」の被験者を入れず、健康男性での臨床試験の結果がそのまま一般的なものとして扱われるようになったということです。それから現在に至るまで、大まかには問題が無かったということで、ここまで慣例化されてきたと考えます。

“性差”による実際の報告

●海外の“性差”事情と実例

アメリカやその他の国々では、一部の医師が治療における性差についての問題点を訴えているグループが存在します。アメリカの医薬品などを統括する「FDA：アメリカ食品医薬品局」が発表した内容で、睡眠導入剤として広く使用されている薬剤の商品名を上げ、その副作用の一つ「夜間せん妄」について、その発現率が女性では男性の5倍になるという報告から、女性への投与を減らすようにすべきという通達が発表されました。その他に、実際に男性と女性では体内の消化器官を通過するスピードにも差があること、また、男女の体脂肪の差についてなど薬剤の分布・代謝に影響があることなどが分かっているため、薬の効果や治療方法の選択にも“性差”を考慮すべきと言えるでしょう。

●“性差”はどのようにとらえるべきなのか？

現在、「LGBT」ついて議論されることが多くなってきているように感じます。しかし、“性差”が健康に及ぼす影響が大きくなればなるほど、意識とは別に、男女の性質を理解しておかなければならないことも必要かもしれません。噂の範疇かもしれませんが、これから出てくるであろう「i PS 細胞」についても、男性から採取したものと女性由来のものでは性質が異なるとも言われています。もちろん簡単な問題ではありませんが、今後の生活で安易に性別を変換してしまうと、使用する薬剤や治療効果に問題が生じる可能性もあるかもしれないのです。

「情報」が飛び交う現代において、何を選択するかが大変重要になっているのかもしれません。